

# インドネシアからの招聘研究者との連携による 異文化理解の授業実践 ーグローバル人材の育成に向けてー

稲葉 みどり

日本語教育講座

## AUE Global Human Resource Development 2012

Midori INABA

*Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

### 要 約

愛知教育大学では、平成23年度より海外の学術交流協定校から研究者を招聘し、国際交流や学術交流を推進している。これらの研究者をグローバル教育の人的資源と考え、筆者は全学向けの授業を実施<sup>1</sup>している。平成24年10月にはインドネシアスラバヤ国立大学から招聘した研究者のR氏の協力を得て、インドネシアの文化や社会、日本語教育、インドネシア語の紹介を中心としたプレゼンテーションの授業を実施した。授業は日本語教育コースの専門授業（対照言語学Ⅱ・日本語教育実践研究Ⅱ・ゼミ）、教養の授業（国際社会と日本）、及び、イメージョン・ルーム活動の時間を活用し、公開授業として全学から参加者を受け入れた。本稿では、この授業の概要を紹介する。そして、授業後に参加者から収集した感想レポートの内容を分析した結果、異文化理解の促進、異文化への関心の高揚、外国語学習への興味付け、海外の日本語教育に関する知識の修得、外向き志向への刺激という面で効果が認められたことを報告する

**Keywords**：グローバル・リテラシー、グローバル人材、日本語教育、異文化理解、インドネシア

#### 1. はじめに

愛知教育大学では、平成23年度より海外の学術交流協定校から研究者を招聘し、国際交流や学術交流を推進している。平成23年度には、タイ、中国、インドネシア、台湾等から8名の研究者が来学した。平成24年度には10名の研究者の受け入れが決定している。これらの研究者を人的資源と考え、筆者は本学の学生、教職員を含めたキャンパスのグローバル教育のための公開授業や講演会等を実施している。平成23年10月には、タイのラチャナカリン大学から招聘した研究者によるプレゼンテーションの授業を実施した。稲葉（2012）ではその授業の概要を紹介し、事後アンケート調査の分析から、異文化理解の促進、海外日本語教育事情の知識の修得、日本語教育に関する専門知識の拡充、異文化コミュニケーション力の伸張、外国語学習への興味付け、キャリア意識の向上、外向き志向への刺激という面で幾分である程度効果が見られたことを報告し

た。

この企画を継続し、平成24年度10月にはインドネシアのスラバヤ国立大学から招聘した研究者のR氏の協力を得て、インドネシアの文化や社会、日本語教育、インドネシア語の紹介を中心としたプレゼンテーションの授業を合計7回実施した。授業は日本語教育コースの専門授業（対照言語学Ⅱ・日本語教育実践研究Ⅱ・ゼミ）、教養の授業（国際社会と日本）、及び、イメージョン・ルーム活動等の時間を活用して公開授業として行い、全学から参加者を受け入れた。

本稿ではこれらの授業の内容を紹介し、授業後に参加者から収集した感想レポートの内容を資料として分析し、この試みが参加者のグローバル・リテラシーの向上に果たした役割を考察する。

## 2. 研究の背景

### 2.1 グローバル人材の育成

現在日本の大学にはグローバルに活躍する日本人人材の育成が求められている。日本企業542社を対象とした「グローバルに活躍する日本人人材に求められる素質、知識・能力（複数回答）」の調査結果<sup>2</sup>を見ると、グローバル人材に産業界が求める素質、能力として、社会人としての基礎的能力に加え、既成概念に捉われず、チャレンジ精神を持ち続ける姿勢、外国語によるコミュニケーション能力、海外との文化、価値観の差異に対する興味・関心等が重要であることがわかる。

一方、最近の大学生に不足している素質・態度、知識・能力については、「主体性」、「職業観」、「実行力」や「コミュニケーション能力」等を指摘する回答が上位を占めている<sup>3</sup>。グローバル人材に求められる力は教育の場でも教師の資質として欠かせないものであり、グローバル人材<sup>4</sup>育成に関して大学に期待されることは大きい。本稿で紹介する取り組みは、微力ではあるが、「海外との文化、価値観の差に興味・関心を持ち、柔軟に対応する」能力や「外国語によるコミュニケーション能力」等に関わる企画と考えている。

### 2.2 グローバル教育の推進

海外の学術交流協定校から研究者を招聘し、国際交流や学術交流を推進するのは平成23年度より始まった新しい試みであるが、愛知教育大学ではこれまでキャンパスの国際化と学生のグローバル教育に関して様々な取り組みを行い、グローバル人材の養成を推進してきた。平成17年度より、教育改善推進経費の助成研究「キャンパスの国際化とグローバル・リテラシーの向上（代表者：安武知子）」の下に、キャンパスの国際化と学生の英語運用力の向上をめざしていくつかの企画・実施をしてきた。日本人学生をアメリカの国際交流協定校に派遣し、日本語や日本文化を英語で紹介するプログラムの開発と実施（稲葉 2005）、協定校から留学生を招聘して本学で日本語・日本文化の短期研修を行うプログラムの開発と実施（稲葉 2006a, 2006b, 2009）等である。これらのプログラムは、稲葉（2008）で分析した結果、幾分ではあるが、本学の日本人学生のグローバル・リテラシーの向上に効果があったことが認められた。

さらに、平成21年度より愛知教育大学内に「英語イマージョン・ルーム」を開設し、英語コミュニケーション力の養成や異文化理解の促進を進めてきた。このプロジェクトは、「ピア・サポーター」として英語を話すことのできる留学生、帰国子女、留学経験者等の協力を得ながら、英語を使ってコミュニケーションをすることにより、学生の英語運用力の向上とともに相互交流を促進するもので、将来、学校現場や地域に

おいて指導的役割を果たす人材養成に寄与する人材の育成をめざしている。稲葉（2010, 2011）では、英語イマージョン・ルームの今後の充実の方策や可能性を検討した。平成23年度からは、英語だけでなく様々な言語や異文化紹介等の活動を取り入れた「イマージョン・ルーム活動」として、異文化理解に関するプレゼンテーションや様々な外国語活動を取り入れた全学向けの行事や活動を提供している。今回のインドネシアに関する企画もその一環である。

## 3. 研究の概要

### 3.1 招聘研究者のプロフィール

R氏は平成24年度に愛知教育大学が招聘した研究者の1人で、学術交流協定校のインドネシアのスラバヤ国立大学日本語学科講師で、学部生に日本語を教えている。大学での教育歴は3年である。滞在期間は平成24年9月1日から10月25日までの約8週間である。

スラバヤ国立大学は、本学とは交流の歴史が長く、これまで学長をはじめとする大学教育関係者が何度も来学している。平成24年11月14日には、本学にて学術交流協定の更新が行われた。また、これまで多くの留学生（教員研修留学生、大学院生等）が同大学から本学に留学している。近年は日本学生支援機構の留学生交流支援制度（SS&SV）により、両大学間で学生と教員が行き来している。よって、本学とは非常に交流が盛んな大学の1つからの来学者である。

この授業を実施するにあたっては、インドネシアからの教員研修留学生のT氏の協力も得た。T氏はインドネシアの高等学校の教師で、専門は数学と物理である。本学では、情報教育コースに所属し、研修を進めている。本学での滞在期間は平成24年4月から平成25年3月である。

### 3.2 授業の概要

R氏によるプレゼンテーションは、日本語教育コースの授業、イマージョン・ルーム活動、留学生の補講授業の場を利用して、2ヵ月間の滞在中に7回実施した。このうち、3回はT氏のプレゼンテーションも含まれている。実施にあたっては、学務ネットにより全学（学生・教職員）に周知し、すべて公開授業として通常の履修生以外にも参加者を受け入れた。以下は実施した授業・活動の概要（演題・内容対象・日時）である。尚、内容は一部重複もあるが、異なる受講者により多くの情報を提供するためである。

#### (1) 「日本語中級総合B」の授業

演題：『インドネシアの紹介・風土と文化』R氏  
内容：「地理・気候・学校・宗教・観光地等」  
対象：留学生

- 日時：2012年10月2日（火）2限  
 (2) 「日本語教育コース・稲葉ゼミ」「イマージョン・ルーム活動 (1)」合同  
 演題：『インドネシアの日本語事情』R氏  
 内容：「スラバヤ国立大学の紹介・日本語教育の現状・乗り物等」  
 対象：日本語教育コース4年生・全学  
 日時：2012年10月3日（水）2限  
 (3) 「対照言語学Ⅱ」「日本語中級総合B」合同  
 演題：『インドネシア語ってどんな言葉？』R氏  
 『インドネシア人ってどんな人？』T氏  
 内容：「インドネシア語と日本語の対照・警察・乗り物・伝統・大衆文化等」  
 対象：日本語教育コース2年生・留学生  
 日時：2012年10月9日（火）2限  
 (4) 「日本語教育実践研究Ⅱ」「国際社会と日本」合同  
 演題：『インドネシアの教育事情』R氏  
 『インドネシアと日本の比較』T氏  
 内容：「インドネシアの日本語学習を取り巻く環境・学校生活・若者文化・料理等」  
 対象：日本語教育コース3・4年生・全学1・2年生・留学生  
 日時：2012年10月9日（火）3限  
 (5) 「イマージョン・ルーム活動 (2)」  
 演題：『日本に来て驚いたこと』R氏  
 内容：「日本人のマナー・ゴミ問題他」  
 対象：日本語教育コース4年生・全学  
 日時：2012年10月15日（月）4限  
 (6) 「イマージョン・ルーム活動 (3)」  
 演題：『日本に来て感じたこと』R氏  
 『インドネシアと日本のちがいがい』T氏  
 内容：「日本人のマナー・教師・行動・忍耐力他」  
 対象：大学院生・全学  
 日時：2012年10月18日（金）4限  
 (7) 招聘研究者による講演会  
 演題：『愛知教育大学での2ヵ月間』R氏  
 内容：「研究紹介・滞在中の活動紹介・日本の印象」  
 対象：全学  
 日時：2012年10月22日（火）17時より

### 3.3 研究課題

本研究では、参加学生に授業後に書いてもらった感想レポートの内容を分析し、学生たちのグローバル・リテラシーの向上にどのような効果をもたらしたかを考察する。あらかじめ質問を用意して記号で回答する形式のアンケート調査ではなく、感想の質的な分析により参加者の知ったことや感じたことを明らかにする。

感想レポートは「新しく知ったこと」「興味・関心を持ったこと」「質問や疑問に思ったこと」「発表者への

コメント」の項目を設け、自由に記述してもらった。約200名分の感想レポートを収集した。これらの感想の内容を質的に分析することにより、参加者がどのようなことを学び、発見し、興味や疑問をもったかを探り、以下の点を中心に授業の効果を調べる。

- (1) 異文化理解は促進されたか
- (2) 海外の文化や価値観の相違に対する興味・関心等は高まったか
- (3) 外国語や外国語学習への興味は高まったか
- (4) 海外の日本語教育に関する知識を修得したか
- (5) 参加者の外向き志向に刺激を与えたか

## 4. 感想レポートの分析

### 4.1 「日本語中級総合B」の授業

「日本語中級総合B」は主に日本語中級レベルの留学生を対象とした授業である。留学生にわかりやすいように、『インドネシアの紹介・風土と文化』という演題で、インドネシアの国旗、地理、気候、生活、学校、宗教、観光地等を取り上げた。

感想レポートを見ると、新しく学んだこととして、「インドネシアには大きな5つの島がある」「雨季と乾季の二つの季節がある」「宗教はイスラム教とヒンズー教とキリスト教がある」「好きな色が赤である」等が挙げられている。

興味を持った点として、「インドネシアの伝統的な乗り物」「観光地」「結婚式には様々なやり方があり、民族により服装も異なる」等が挙げられている。また、「インドネシアの乗り物はタイと似ている」「インドネシアには台湾と同じように朝食があるのはおもしろい」「インドネシアの観光地はあまりきれいではないと思っていたがそうではなかった」「写真がたくさん見られ、まだ行ったことのないインドネシアの雰囲気を身近に感じることができた」「服の色の意味をもっと詳しく知りたい」等の感想も見られる。

質問として、「若者の平均結婚年齢は何歳か」「男の人は何人妻を持てるのか」「女の人は再婚できるか」「1年に何回ぐらい地震があるか」「地震があるところはスマトラだけか」「お祭りの時期はいつか」「物価はどの



図-1：民族によって異なる結婚式の説明

ぐらいか」「旅行はどの時期にいくとよいか」「バリ島の雰囲気はジャワ島と異なるか」等が挙げられ、様々な角度から興味を持ったことが示唆される。

発表者へのコメントとして、「先生の発表のしかたはすばらしかった」「自信を持って発表していて話すはやすさも適当でわかりやすかった」「声がよく聞こえてわかりやすかった」「写真でインドネシアのことをいろいろ知ることができた」等が挙げられ、わかりやすい授業であったことを示している。

#### 4.2 「日本語教育コース稲葉ゼミ」「イメージ・ルーム活動 (1)」合同授業

この授業は主に日本語教育コースの4年生を対象とした授業である。よって、『インドネシアの日本語事情』という演題で、スラバヤ国立大学と日本語学科の紹介、日本語教育の現状を中心に上げた。

日本語教育事情に関しては、「スラバヤ国立大学の日本語学科に400人も学生がいることに驚いた」「日本語にニーズが高まっていることを実感した」との感想が述べられている。日本語学科のカリキュラムが紹介されたので、「日本語学科の授業内容が自分たちが受けている科目と同じである」「日本語の授業がいろいろあり専門的である」等のことを知り、「教育の内容に興味を持った」としている。そして、「日本語の授業の様子を見てみたい」という外向き志向や、「たくさんの人に日本や日本語に興味をもってもらえてうれしい」「日本のことをもっと知ってほしい」等の感想も見られる。

また、結婚式やジャカルタの伝統的な乗り物の紹介もあったので、「自転車のような乗り物がいろいろ

あっておもしろい」「バイクを利用する人が多い」等の感想の他、「乗り物は安全か」「交通事故は多いか」等の質問が出されている。そして、「インドネシアについてあまり知らなかったが、案外親しみのある国だと思った」「料理や祭りなど、文化についてもっと知りたい」等の記述から、関心が高まったことがうかがえる。

#### 4.3 「対照言語学Ⅱ」「日本語中級総合B」合同

日本語教育コースの2年生対象の専門科目「対照言語学Ⅱ」では『インドネシア語ってどんな言葉?』という演題で、R氏によるインドネシア語についての講義を計画した。さらに、T氏には、『インドネシア人ってどんな人?』という演題で、インドネシアの人々の生活や考え方に関する講義をした。この授業は、日本語教育コースの2年生と留学生の「日本語中級総合B」との合同で行った。公開授業なので他専攻の学生や大学院生等、合わせて50名以上が参加した。

はじめにR氏がインドネシア語の基本的な音声、発音の特徴、文字表記の方法を紹介した。さらに、インドネシア語と日本語の言語構造の比較、語順や文法体系のちがひ、アクセント、イントネーションの特徴等の説明があり、盛りだくさんの内容であった。その後、インドネシア語の日常会話表現を練習した。

インドネシア語の紹介に関する感想を見ると、「アルファベットを使うのを初めて知った」「テンス(時制)を副詞(句)で表す」「名詞、形容詞の語順が日本語と逆」を学んだことがわかる。また、インドネシア語の会話表現に関しては『行ってきます』や『行ってらっしゃい』は言わないそうだが、家を出るときには何も言わずに出ていくのか等の疑問も沸いたようだ。

インドネシア語に対しては、「日本語と発音がかなりちがう」「活用がないので学びやすいと思った」「インドネシア語についてはまったく知らなかったので全て新鮮に感じた」等の感想が見られる。

英語との対照で考えた学生もいる。「アルファベットの発音が英語とはちがう」「英語とちがうアルファベットの使い方を学ぶ」「英語よりもとっつきやすく感じた」等の様々な発見があったことがわかる。

「日本語を学ぶとき大変だったことは何か」「なぜ日本語を勉強しようと思ったか」「日本語は学ぶのに難しい言語か」等、授業を通じて様々な疑問をもったこともわかる。

授業全体については、「初めてインドネシア語について学んだが説明がわかりやすかった」「文法練習のときにいっぱい間違えたのにキーホルダーをもらえてうれしかった」等が見られ、参加した学生の外国語に関する興味を増し、外国語学習に関する意識の向上につながったと考えられる。



図-2: インドネシアの結婚式の紹介



図-3: 日本人学生との交流風景

T氏によるインドネシアの生活文化の紹介では、電車、バス、バイク等の交通手段、警察、学校、服装等が日本と比較しながら説明された。

インドネシアの交通手段については、「電車やバスの乗車率が日本よりはるかに高い」や「バスは街のどこでも乗降のために停まる」「それが交通渋滞を引き起こす原因になっている」等の点に驚いたことが感想からわかる。また、「電車の車両外のところに乗ってもよいのか」という安全面に関する質問が出た。「電車の乗り方が日本と異なる」などの気づきを促し、「電車や警察など実際に見に行きたい」等の外向き志向も見られた。

インドネシアの学校と教育については、「小中高の学校を卒業するとき国の学力試験がある」「学校が始まる時間がはやい」「学校朝7時に始まり、高校でも2時半に終わる」「学校に名前がなく、番号で呼ぶ」等を初めて知ったと回答している。生活文化については、「自販機がなく、売る人がいる」「日本のコンビニがある」「インドネシアの学生もスカートを短くする」「伝統的な服装が県によって異なる」等を知ったと回答している。

質問としては、「なぜお酒を飲んではいけないのか」「音楽のジャンルはどのようなものがあるか」「インドネシアで有名な日本人はいるか」「ボーイスカウトをやらなければいけないのか」等が挙げられ、さらに関心を高めたといえる。

インドネシア語に関する講義を初めて受けたという参加者も多かった。全体の感想として、「インドネシアの文化を学んだことが初めてだったので新しく知ったことばかりだった」「異文化に触れることができよ

かった」「生活習慣などインドネシアならではのことを知ることができた」「日本と全くちがうことが多くて度肝を抜かれた」等、この授業が海外の国について知る重要な機会になったことが示唆される。さらに、「もっといろいろ知りたくなった」「また来て話してほしい」「インドネシアに機会があれば行ってみたいと思う」等、異文化への関心を深め、幾分ではあるが外向き志向に刺激を与えたことがわかる。

#### 4.4 「日本語教育実践研究Ⅱ」「国際社会と日本」合同授業

この授業は日本語教育コース3年対象の「日本語教育実践研究Ⅱ」と教養科目である「国際社会と日本」の合同授業である。当初は「日本語教育実践研究Ⅱ」の公開授業を予定していたが、学務ネットで周知したところ同時帯に開講している「国際社会と日本」（川口直巳助教担当）の学生より参加希望が出たため、急遽両授業の合同として実施することになった。「日本語教育実践研究Ⅱ」の受講生は全員海外教育実習等の経験がある学生である。「国際社会と日本」は教養科目で受講生は主に全学の1年生である。他専攻の学生や留学生の参加も見られた。

これらの参加者向けの内容として、授業では、R氏による『インドネシアの日本語教育事情』の紹介とT氏による『インドネシアと日本の比較』を計画した。

はじめにR氏がスラバヤ国立大学を紹介した。その後、日本語学科の紹介、日本語教育や日本語学習の様子、カリキュラムや学校行事等について話を進めた。協定校であることを知らなかった参加者もいるように見受けられた。T氏のインドネシアと日本の比較では、生活、学校、若者、服装等に関する内容を取り上げた。

感想を見ると、スラバヤ国立大学の紹介では、「大学の中にイスラム教のモスクがある」「7月が新学期で6月に終わる」ことに驚いたとしている。日本語学科については、多くのことを学んだようである。「日本語学科には400人も学生がいる」「日本語学科に先生が18人もいる」「日本語学科用の図書館がある」「日本語学科の授業が私たち日本語教育コースの授業と似ている。例えば、日本語教材研究、学習ストラテジー、教授法、音声学、形態論、心理言語学、評価法、統計学等がある」等の回答が見られる。質問として、「日本語学科に日本人学生はいるか」「日本語学科の学生は日本に留学するか」「日本語学科の図書館には日本の本があるか」等が出されている。

日本語教育については、「海外に日本のことを学ぶ人がいるのに驚いた」「日本語は学びたい人が独学だと思っていた」「日本語学科があるのに驚いた」「日本が初めてなのにとてもきれいな日本語をはなすことができるので、すごいと思った」等の発見があったことが



図-4：インドネシア語の紹介



図-5：世界で一番込んでる乗り物の紹介



図-6：スラバヤ国立大学のキャンパスの紹介



図-7：よさこいサークルの紹介



図-8：伝統的な服「バティック」の紹介

書かれている。

「日本語学科の就職先はどのようなところがあるか」という質問や、「先生になるためだけでなく、日本企業で働くために日本語を学んでいる」「日本企業はインドネシアの企業に比べて給料や保険制度が充実している」「インドネシアのホンダの工場の従業員は日本語学科の卒業生が多く、日本語がわかる」等の就職やキャリア意識に関わる質問や感想も見られる。

日本文化については、「日本に興味をもったきっかけは何か」「よさこいの指導は日本人がするのか」「インドネシアで定着している日本の文化は何か」等の質問を挙げている。日本とインドネシアの比較では、「物価の違い」「お酒が禁止」「卒業試験があり小学生でも国の試験に合格しないと落第になる」「ボーイスカウトが強制である」「公立学校には名前がなく番号で呼ぶ」「インドネシア人は仕事より家族のほうが大切と考えている」等に驚いたと述べている。

タイの協定校にインターンシップで教育実習にいった学生からは、「バイクによく乗ること、食べ物やトイ

レの形などタイと似ているところが多々ある」「最近タイへ行き、東南アジアに興味を持っている」「タイでも屋台をたくさん見た」等の回答が見られる。また、「夏休みにフィリピンに行ったが、バイク、屋台、トイレなどが似ている」と思った学生もいる。

生活面では、「自動販売機がなく、人々が路上、屋台、バス、列車などで売っている」「バスの中にも商品を売りに来る」等を知ったようである。また、「屋台ではどのようなものが売っているのか、実際に行ってみてみたい」「料理を食べてみたい」「バティックがほしい」等、様々な方面からの関心が高まったことがわかる。

食べ物や料理については、「料理は辛いというが、日本と比べてどのぐらい辛いのか」「チリソースがいろいろある」「伝統的なパフォーマンスやサッカーを見てみたい」と述べている。さらに、「男女差別はあるか」「バイクの3人乗りは危ないと思わないのか」「自動販売機がほしくないか」等の質問も出ている。

異文化理解に関しては、「日本人は日本の文化について深く学ばない。日本についての知識は外国人のほうがよく知っている」「昨年インドネシアの学生をホストファミリーとして受け入れたが、言葉の壁がありわからないことも多かった。今回の説明を聞いて疑問のいくつかが解決された」「インドネシアでも日本と同じように学生がスカートを短くしたり、コスプレをしたりする、韓国のアイドルが人気になったりするという話を聞いて、親近感をもった」等が見られる。

また、大衆文化については、「インドネシアにも韓流ブームがある」「韓国系の音楽が人気など日本と同じところがあることがおもしろい」「学校生活や子どもたちの生活、伝統的な服装やダンスから最近の文化、音楽、テレビからサブカルチャーまであっておもしろかった。日本と違うところもたくさんあるが、似ているところもあっておもしろい」と述べている。

全体の感想としては、「インドネシアのことについて知らなかったので、初めて知ることばかりだった」「日本のことが知られていてうれしかった」「日本へ来て一番驚いたことを聞いてみたい」等が見られる。

#### 4.5 イマージョン・ルーム活動(2)

イマージョン・ルームの活動(2)では、『日本に来て驚いたこと』という演題の下で、R氏が日本に初めて来て感じたこと、日本での生活で気づいたこと、不思議に思うこと等をインドネシアの生活と比較しながら紹介した。主な参加者は日本語教育コースの4年生である。また、この時間はR氏に浴衣を試着してもらい、それで授業を行った。

日本に来て驚いたことは、日本人のマナーのよさ、ゴミ問題等が中心となった。質疑応答の後、学生は自分の卒論の内容に関わる質問やディスカッションを



図-9：卒論テーマについて話す学生たち



図-10：教職大学院生の質問に答える様子

行った。オノマトペをテーマに研究している学生は、インドネシア語にはオノマトペに相当するものがあるかどうか、また、日本語教育においてオノマトペをどのように扱っているか等の質問をした。

また、色彩感覚に国際的な違いを研究している学生は日本の色彩の感覚を説明し、その後、インドネシアでは色にどのような意味があるか、色が生活の中でどのように使われているかを質問した。日本人学生が自分たちの研究テーマについて積極的に外からみた情報を得ようとする姿が見られた。

#### 4.6 イマージョン・ルーム活動 (3)

イマージョン・ルームの活動 (3) では、『インドネシアと日本のちがいが』という演題の下で、R氏はインドネシア人から見た日本の印象を話した。「日本人のマナー・教師・行動・忍耐力」等が取り上げられた。T氏は、『インドネシアの生活、学校、交通、警察、流行歌等』につて紹介した。主な参加者は教職大学院生、中等社会4年生、大学院修了生である。

参加者の感想には新しく知ったこととして、「日本のバスや電車が静かだという印象をもったこと」「インドネシアでは週1回街に住む人同士でゴミ掃除をしていること」「お父さんや男性が掃除に参加すること」「インドネシアの警察は役割ごとに区別されていて、いろいろな種類があること」「モラルを守るための警察がいること」等の回答が見られる。

また、興味を持ったことには、「ベチャック、バジャイ、ベモなど日本では見かけない乗り物」「ゴミの分別の方法やバスや電車でのマナー」「音楽の流行」「インドネシアの街で住むルール」等が挙げられている。

質問としては、「インドネシアの交通巡査はどのような基準で取り締まっているのか」「ゴミの最終処理はどうするのか」「たばこの吸い殻はどうするのか」が挙げられている。さらに「日本人とインドネシア人の言語行動はどのように違うか」等、言語文化に関するものも含まれている。「日本と比べてインドネシアの自慢できる場所はどこか」という質問も見られる。

全体の感想として、「外国の人から見た日本のイメージはなかなか直接聞けないので、機会があつてよ



図-11：英語で行われたイマージョン・ルーム活動

かった」「日本人が当たり前だと思っていることが、インドネシア人からみると驚くことを知った」等、異文化理解が促進されたと思われる。また、「そこに住んでいる人ならではのゴミの話はおもしろかった」「バスや電車の中で隣になった人と話をして新たな出会いとなることが素敵だと思った」「インドネシアのことがもっと知りたくなった」「それぞれの話題についてもっと聞きたかった」等の感想も見られる。教職大学院生はこのような海外の人の話を直接聞く機会はほとんどなく、今後もあれば参加したいと述べている。

イマージョン・ルーム活動はこの他にも実施<sup>5</sup>した。図-11はその風景である。台湾からの招聘研究者も参加し、英語のみで討論が行われた。司会はT氏である。

#### 4.7 招聘研究者による講演会

招聘研究者による講演会は、主に本学の教職員を対象として行われた。出席者は学長、理事、招聘研究者、教育創造開発機構教職員、大学院生、留学生等で、約25名程度である。R氏は、『愛知教育大学での2ヵ月間』という演題で、研究紹介、愛知教育大学での活動紹介、日本の印象等を述べた。R氏の研究テーマは「日本語の効果的な聴解指導法」である。インドネシアの大学では日本語能力試験のN3、N4を目指す学生が多く、聴解の効果的な指導法の研究は必要性が高いことを説明した。学長からは積極的に質問が出された。講演会等を通して研究者と直接交流の機会を持つことは、今後のさらなる学術交流の発展につながると考えられる。



図-12：学長との研究に関する質疑応答

## 5. グローバル教育の効果

R氏の授業ではインドネシアに関して様々な紹介が行われた。参加した学生の感想レポートから、インドネシアの地理、気候、伝統的な服装、宗教、学校、料理等の知識を得て、関心を高めた様子が見られた。また、日本語とインドネシアの比較から生活習慣や考え方のちがいを学んだことも分かった。よって、興味関心が高まり、異文化理解が促進されたのではないかと考えられる。

感想の中には、インドネシアについて聞くのは初めてで、授業内容の全てが新しく知ったことであるという回答が何件も見られた。授業は楽しかったという回答も多い。よって、異文化に触れ、異文化を学ぶことで、異文化コミュニケーションの楽しさに気づいた学生が何人かいると思われる。

インドネシア語の学習はほとんどの参加者が初めてだったと思われる。文法構造の比較がおもしろいと感じた人、学びやすい言語と感じた人、会話表現や言語行動に興味をもった人等印象は様々であるが、外国語学習への興味は多少なりとも高まったと思われる。

授業では、日本語学科のカリキュラム、学習者数、教員数、教科書、学習目的、日系企業への就職事情等を紹介した。感想レポートにはインドネシアの日本語教育に関して情報を得た旨の記述が多く見られ、海外日本語教育事情の知識を修得、拡充したと考えられる。

インドネシアへ教育実習に行ってみたい、インドネシアに実際に行き紹介されたことを実体験したい等の回答も多く、この企画を通じて少しではあるが日本人学生の外向き志向に刺激を与えられたと考える。

よって、本稿で紹介した海外からの招聘研究者の授業によるグローバル・リテラシー向上の試みは、参加者の異文化理解を促進し、海外事情に関する知識を深め、外国語への興味を高め、海外日本語教育事情の知識の修得し、外向き志向への刺激を与えるという面で幾分ではある貢献できたと思っている。

最後に、授業のためにR氏とT氏は、参加者がどのようなことを知りたいか、どのようなことに興味を持つか、どうしたら楽しく聞いてもらえるか等を一生懸

命考えて準備した。音楽、風俗、アニメなど楽しい企画が毎回盛り沢山で、複数回参加した人も多い。これは「もっと話を聞きたい」という感想からも裏付けられる。ここではその全てを紹介できないが、インドネシアとの国際交流に一つの役割を果たしたと思う。

## 注

- <sup>1</sup> 平成24年5月には中国南京師範大学からの招聘研究者による講演等を実施した。
- <sup>2</sup> 日本経済団体連合会「グローバル人材の育成に向けた提言」資料編（2011年6月14日）資料編，図1，p.2)
- <sup>3</sup> 日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期待に関するアンケート結果」（2011年1月18日）
- <sup>4</sup> 日本経済団体連合会の「グローバル人材の育成に向けた提言」（2011年6月14日，p.2）ではグローバル人材を「日本企業の事業活動のグローバル化を担い、グローバル・ビジネスで活躍する（本社の）日本人及び外国人材（p.7）」を指すと定義している。本稿ではグローバル人材を企業のみならず、教育の現場でも活躍できる人材と広く解釈して用いることにする。
- <sup>5</sup> 英語によるイマージョン・ルーム活動も行った。演題は『インドネシアについてもっと知ろう』である。（平成2012年10月17日）紙面の制約から本稿では省く。

## 謝 辞

この授業は研究者のR氏、研修留学生のT氏をはじめ、国際交流センター職員の方々、日本語教育講座教員の方々、参加者の方々のご協力を得て実施することができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 稲葉みどり（2005）。「米国における教育実習プログラムの成果と充実の方策」『教育実践総合センター紀要』8号，pp.145-156.
- 稲葉みどり（2006a）。「日本語・日本文化短期研修プログラムの開発と実践」『教育実践総合センター紀要』9号，pp.35-42.
- 稲葉みどり（2006b）。「自己発信型の日本語力の養成—体験密着型のオリジナル教材を活用して」『教養と教育』6号，pp.17-26.
- 稲葉みどり（2008）。「国際交流と学生のグローバル・リテラシーの向上—アンケート調査による効果の分析」『教育実践総合センター紀要』11号，pp.33-40.
- 稲葉みどり（2009）。「『日本語・日本文化短期研修プログラム』の整備・充実と今後の方向性—試行4年間を振り返って」『教育実践総合センター紀要』12号，pp.87-94.
- 稲葉みどり（2010）。「英語イマージョン・ルームの開設—プロジェクトの役割と今後の可能性」『教育実践総合センター紀要』13号，pp.37-44.
- 稲葉みどり（2011）。「英語イマージョン・ルームの活動—自律的な異文化交流の推進」ウェブマガジン『留学交流』8号.
- 稲葉みどり（2012）。「愛知教育大学におけるグローバル人材の育



成の取り組み—タイからの招聘研究者を人的資源として」  
『教育創造開発機構紀要』2号. pp. 19-27.

## 資 料

- 日本経済団体連合会「グローバル人材の育成に向けた提言」  
(2011年6月14日)
- 日本経済団体連合会「グローバル人材の育成に向けた提言」資  
料編 (2011年6月14日)
- 日本経済団体連合会「グローバル人材の育成に向けた提言」概  
要 (2011年6月14日)
- 日本経済団体連合会「産業界の求める人材像と大学教育への期  
待に関するアンケート結果」(2011年1月18日)